

DOI:10.16216/j.cnki.lsxwbk.201801023

论近代日语口语中的程度副词文体特征

赵 宏

(大连外国语大学 日语学院, 辽宁 大连 116044)

摘 要:以能反映近代人们口语真实情况的“落語”速记本,“演説”速记本,“史談会”速记本这三种速记资料为语料,对近代表示“高量级的”一类程度副词的文体特征进行调查研究,结果表明,“大層”“大變に”“大きに”“大變”“大いに”“甚だ”是当时人们口语中比较常用的程度副词。其中,“大層”“大變に”“大きに”“大變”不受语相限制,作为百姓的日常用语在比较随意的场合被广泛使用。“大いに”“甚だ”则是当时在郑重场合的发言中经常被藩主、知识分子阶层所使用的程度副词。“ひどく”“恐ろしく”“いやに”“ばかに”“うんと”“べらぼうに”“えらく”在随意的场合容易出现,而“頗る”“非常に”“極端に”“極々”“全然”“大層に”“極めて”则在郑重的场合容易出现。研究结果在一定程度上明晰了近代日语口语中的程度副词的文体特征。

关键词:速记资料;近代日语;口语;程度副词;文体特征

中图分类号:H36 **文献标识码:**A **文章编号:**1000-1751(2018)01-0023-09

一、引 言

程度副词是表示事物的性质、状态或某些动作为行为所达到的某种程度的副词。现代日语副词中,程度副词是非常重要、使用频率又相当高的一类副词。程度副词一般被分为三大类。即表示“高量级的”(如,“とても”“非常に”等)、表示“低量级的”(如,“ちょっと”“わずかに”等)、表示“比较级的”(如,“ずっと”“ひときわ”等)。其中表示“高量级的”

一类程度副词与其他类程度副词相比种类丰富,它的多样性以及在使用上的复杂性甚至可以看作是现代日语的一大特点。关于现代,渡边実(1990)^①、仁田義雄(2002)^②等对它们在组配方式、语法意义、语义指向、分类体系等方面的研究已经比较成熟。但是,对程度副词的历史的研究成果还比较少。很多语言事实和现象都表明程度副词是随着时间的变化而变化的。例如,《国語史辞典》中“副词”项目的执笔者京極興一(1979)^③通过比较《日本国語大辞

收稿日期:2017-06-30

基金项目:国家社会科学基金一般项目“基于语料库的近现代中日语言接触研究”(13BYY159);国家语委“十三五”科研规划 2017 年度科研项目“语言接触视角下近代汉语词汇体系生成研究——以近代中日国語辞典互动为中心”(WT135-26)

作者简介:赵 宏(1971-),女,辽宁大连人,大连外国语大学教授,博士,主要从事日语语言学 and 日语教育学研究。

①渡边実. 程度副詞の体系. 上智大学国文学論集(23)[J]. 1990:1-16.

②仁田義雄. 副詞の表現の諸相[M]. 東京:くろしお出版,2002:1-325.

③林巨樹・池上秋彦. 国語史辞典[M]. 東京:東京堂,1979:304.

典》^①(登录的副词有6000个左右)和《现代杂志九十種の用語用字》^②(登录的副词1000个左右)中的副词种类后指出:“この二つの数からすると、古代から現代まで相当数の副詞が消えあるいは生じた、すなわちかなり激しい盛衰のあったことが知られるのである”,并且论述了进行副词的历史研究的必要性。另外,在这之前,松井栄一(1977)^③也指出:“昭和20年代には「全然いかす」「全然すばらしい」などの「全然」という語で、程度の甚だしさを表現することが流行した。これが下火になると、次には「すごく」「すすごく」がとってかわった”。时间进入二十一世纪,程度副词的变化更为激烈。《新版日本語教育事典》(2005)^④认为:“程度副詞のなかでもとくに、程度が大きいことを表すものは、使い古されるとインパクトがなくなり、より斬新な表現が求められるため、表現の移り変わりが激しく、若年層を中心として現在もさまざまな表現が生まれ、また消滅している”。近年来较为流行的程度副词有“超”“激”“めっちゃ”等,经常能在年轻人日常会话中听到“超うれしい”“激安”“めっちゃかわいい”等表达方式。因为目前国内外关于这类程度副词在现代方面的研究,无论是在广度还是在深度方面都取得了长足的发展,并且语言是变化着的,所以本文把视角转为近代,拟对近代日语程度副词中的表示“高量级的”一类的文体特征进行考察,可以为日语程度副词的历史研究提供重要的语言事实。

对于近代程度副词,松井栄一(1977)^⑤进行了细致的研究。松井调查了从明治初期开始的程度副词的兴衰,最后得出这样的结论:“甚だ”“大いに”“ごく”“極めて”“至極”“頗る”“大層”“非常に”“大変”“ひどく”是“近代口语中最具代表性的,表示程度极高的副词”。这一考证明确阐述了明治期以后程度副词的时代性的变迁状况。但是,调查资料只局限于文学作品,并且没有把“地の文”和“会話文”等分开进行调查,我们从中并不能知道在这之外的口语

资料中的程度副词的实际使用情况。因此,本文拟关注一下速记资料。明治二十年代,除了文学作品以外,大量的速记资料被出版,表示各种各样的文体和语相的语言资料开始丰富起来,能够从多方面来明确当时的口语的实际情况。关于速记资料,佐藤武義(1995)^⑥做了这样的叙述:“速記資料は、口語体をそのまま活字化しているもので、明治の口語資料として貴重なものである。落語・講談・演説の速記資料がある。明治十七年、三遊亭円朝述《怪談牡丹燈籠》は速記本として刊行され、言文一致運動へも影響を与えた。”这也是本文使用速记资料为语料的重要理由。

二、调查资料

作为调查资料,本文使用“落語”速记本、“演説”速记本和“史談会”速记本这三种速记文献。一般认为,“落語”速记反映了明治时期各阶层和各种职业的人们日常的口头用语,“演説”速记和“史談会”速记则反映了发言人在公共场合郑重的用语。以下,略为详细地介绍一下这三种速记。

(一)“落語”速记

“落語”速记是速记语言资料的一种。“落語”是通过会话或夹杂着动作来描述以滑稽为中心内容的一种传统表演艺术。以田鎖綱紀确立的速记法为基础,若林堪藏和酒井昇造作记录并出版的三遊亭円朝的《怪談牡丹燈籠》是“落語”速记的开始。不管是表演方式还是表演内容,“落語”都与中国的单口相声相似。这里所列举的“落語”都是当时刊登在杂志《百花園》上的作品。本文以再次刊登这些作品的《口演速記明治大正落語集成》(全7卷,講談社,1980年刊)的第1卷到第4卷的明治22~29年的174部作品为调查资料。这174部作品的演者、作品数以及作品年代如下:

三遊亭円遊(第三代)51作品(明治22年5月10

①日本大辞典刊行会. 日本語大辞典[M]. 東京:小学館,1980:全20卷.

②国立国語研究所. 国立国語研究所報告(第25)[R]. 東京:国立国語研究所,1964:1-337.

③松井栄一. 近代口語文における程度副詞の消長[M]//松村明教授還暦記念国語学と国語史. 東京:明治書院,1977:738.

④日本語教育学会. 新版日本語教育事典[M]. 東京:大修館書店,2005:88.

⑤松井栄一. 近代口語文における程度副詞の消長[M]//松村明教授還暦記念国語学と国語史. 東京:明治書院,1977:737-758.

⑥佐藤武義. 概説日本語の歴史[M]. 東京:朝倉書店,1995:40.

日~26年12月5日)

禽語楼小さん(柳家小さん第二代)39作品(明治22年9月5日~28年7月20日)

春風亭柳枝(第三代)18作品(明治23年6月5日~27年1月20日)

橘家円喬(第四代)28作品(明治27年3月20日~29年1月20日)

古今亭今輔(第二代)7作品(明治22年10月5日~23年2月20日)

柳家小さん(第三代)17作品(明治28年11月20日~29年12月5日)

三遊亭円生(第四代)4作品(明治22年6月20日~23年6月5日)

三遊亭遊三(初代)4作品(明治23年6月20日~26年11月26日)

三遊亭新朝(不明)2作品(明治23年3月20日~23年4月5日)

土橋亭りう馬(第七代)1作品(明治23年5月20日)

桂文楽(四代目)1作品(明治24年1月5日)

談洲楼燕枝(初代)2作品(明治24年12月20日~25年1月20日)

另外,关于选择这些作品作为语料的意义,《口演速記明治大正落語集成》的编者暉峻康隆(1980)^①在第一卷的卷末做了如下的阐述。

江戸言葉をふまえながらも、欧米文化の急激な影響のもとに変貌した、標準語の基本となった東京言葉の資料としては、その時々の各階層の言葉をきわめてリアルに用いている落語の速記にしくはない。三遊亭円朝の速記が二葉亭四迷や山田美妙らの新文体、言文一致のモデル・ケースとなったが、この当代口語の使用はもちろん円朝に限ったことでなく、他の咄家もすべてそうであったから、この落語速記集成は、明治・大正の東京語資料として、不可欠のものとなるであろう。

由此可以认为,这些语料在某种程度上比当时的小说更能清楚地、真实地反映人们的日常生活中

的口语的实际状况。

(二)“演説”速记

演说是指在众多人面前表述自己的意见和主张的语言活动。西方的演说和演说法于明治初期传入日本。田鎖綱紀在明治15年时开办了速记法的讲习会,由此演说也开始文字化了。在这里,本文以《近代演説討論集》(ゆまに書房・1987~1988年刊)作为演说速记的资料。《近代演説討論集》收录了明治10年代到20年代的演说,其中特别采用了明治20年代的演说。这是因为明治20年代左右的演说文与当时的小说相比,更接近于言文一致体。对此,森岡健二(1977)^②这样叙述:“言文一致体の成立に与えた演説文の影響で、少なくとも明治二〇年ごろの演説文は、当時の口語小説よりも遥かに言文一致体に近づいていることが指摘できる。”

本文所用资料如下(全部是文言文的演说资料被排除在外):

国民演説第一集、第二集、第三集(明治22、23年、第十五卷所收)

明治大家雄弁演説、日本大家演説(明治23年、第十六卷所收)

時事問題名士演説第一集(明治26年、第十八卷所收)

時事問題名士演説第二集、第四集(明治26年、第十九卷所收)

(三)“史談会”速记

明治22年4月,民间的有志者收集了幕末维新动乱期的资料,创立了史谈会,活动由此开始,从此编辑发行了“史談会”速记本。这些都是亲身经历过幕末维新动乱期的故老们的谈话,将它速记下来,并将其活字化了的资料。《史談会速記録》的第1辑是明治25年9月发行的,一直持续到昭和13年4月,共发行了411辑。本文只取其中的第1辑到第52辑,这些是明治25年9月到明治29年12月的全部的速记。“史談会”速记本反映发言者的语言,连做笔录的年月日也清楚地记录着,作为近代语言资料的利用价值很高。

①暉峻康隆.口演速記明治大正落語集成[M].東京:講談社,1980:482.

②森岡健二.演説[M]//佐藤喜代治.国語学研究事典.東京:明治書院,1977:827.

三、调查对象

调查本稿的调查项目限定为表示“高量级的”一类程度副词,其他的种类不列为考察项目。在此之所以特别提出表示“高量级的”副词,是因为此类副词较之于其他种类的词要多,而且适于进行词与词之间的比较。“あまり”“いたって”“うんと”“おおいに”“かなり”“きわめて”“ごく”“しごく”“ずいぶん”“すごく”“そうとう”“たいへん”“とても”“なかなか”等就属于这类程度副词。作为调查对象的近代日语程度副词,松井栄一(1977)参照了“国立国語研究所(1964)的《分類語彙表》^①中的“3・相の類”后,经过反复推敲,最后列举出以下词语:

すこぶる はなはだ はなはだしく いと
いたく 大層 大層に 大変 大変に 非常に
大いに ごく ごくごく 至極 極めて 至って
極端に 一方ならず ばかに いやに べらぼう
うに 豪気に とびきり 法外に 滅法 とてつ

もなく とても 無上に 極度に ひどく
大きに やげに えらく 恐ろしく この上(も)
なくよにも いても 著しく すてきに すばら
しく 物すごく とほうもなく 全然 すごく
うんと

松井把以上的45个程度副词作为考察近代日语的调查项目,本文也欲以这45个词语作为调查项目,来考察在明治三种速记资料中程度副词的使用状况。

四、程度副词的使用状况

在这里我们的研究焦点是,在《落語》(《口演速記明治大正落語集成》的略称,以下同)《演説》(《近代演説討論集》的略称,以下同)《史談会》(《史談会速記録》的略称,以下同)这些速记资料中,各个程度副词使用的多寡和分布,各个程度副词根据资料的种类和使用不同其使用情况是否有所区别,什么样的程度副词是当时人们口语中的最常用的程度副词,具体见表1。

表1 程度副词在速记资料中的使用情况

位次	落語			演説			史談会		
	程度副词	使用数	使用率/%	程度副词	使用数	使用率/%	程度副词	使用数	使用率/%
1	大層	203	25.7	大いに	103	26.0	大いに	397	38.0
2	大変に	153	19.4	甚だ	74	18.7	甚だ	170	16.3
3	大きに	127	16.1	非常に	54	13.6	大変	93	8.9
4	大変	121	15.3	極く	36	9.1	極く	61	5.8
5	甚だ	54	6.8	大層	29	7.3	非常に	60	5.7
6	ひどく	41	5.2	大変	26	6.6	大層	53	5.1
7	極く	32	4.1	頗る	23	5.8	頗る	51	4.9
8	恐ろしく	17	2.2	大変に	21	5.3	至極	47	4.5
9	いやに	9	1.1	至極	7	1.8	至って	43	4.1
10	ばかに	8	1.0	極めて	7	1.8	大変に	22	2.1
11	非常に	7	0.9	大きに	4	1.0	極めて	20	1.9
12	至って	5	0.6	大層に	3	0.8	大きに	14	1.3
13	至極	4	0.5	至って	3	0.8	ひどく	7	0.7
14	うんと	3	0.4	極端に	2	0.5	とても	4	0.4
15	とても	2	0.3	とても	2	0.5	極々	2	0.2
16	べらぼうに	2	0.3	極々	1	0.3	大層に	1	0.1
17	えらく	1	0.1	全然	1	0.3			
18	大いに	1	0.1						
合计		790	100		396	100		1 045	100

① 国立国語研究所. 分類語彙表[M]. 東京:秀英出版社,1964:1-169.

通过调查后得知,程度副词“大層”“大変に”“大ききに”“大変”“甚だ”“ごく”“非常に”“至って”“至極”“とても”“大いに”在三种资料中都被使用。“頗る”“極めて”“極々”“大層に”在《演説》和《史談会》中被使用,但在《落語》中完全没被使用。“いやに”“うんと”“えらく”“恐ろしく”“ばかに”“べらぼうに”在《落語》中被使用而在《演説》和《史談会》中完全没被使用。

(一)《落語》中程度副词的使用状况

从《落語》的 174 部作品中检索出 18 种程度副

词。其中,“大層”“大変に”“大ききに”“大変”的例子最多见,这 4 种合计起来,占全体的 70%左右。但是,这 4 个词在《演説》《史談会》中,每个使用率都是全体的 10%以下。特别是“大ききに”在《演説》和《史談会》中,都只是约 1%的使用率。“いやに”“うんと”“えらく”“恐ろしく”“ばかに”“べらぼうに”这 6 个词在《落語》中,使用率虽然很低,还是能看到用例的。但是这 6 个词在《演説》《史談会》中却没有出现。

为了明确程度副词的实际使用状况,本文调查了演者的使用情况如表 2 所示。

表 2 演者的使用情况

演者	使用的程度副词及使用数
三遊亭円遊 (305 例)	大層(103)、大変に(67)、大変(46)、大ききに(35)、ひどく(18)、恐ろしく(10)、いやに(9)、極く(9)、ばかに(5)、至極(2)、甚だ(1)、
禽語楼小さん (183 例)	大変(36)、大ききに(29)、甚だ(29)、大変に(26)、極く(18)、大層(17)、ひどく(9)、非常に(7)、至って(3)、うんと(3)、大いに(1)、恐ろしく(1)、至極(1)、とても(1)、ばかに(1)、べらぼうに(1)
春風亭柳枝 (66 例)	大層(21)、大ききに(17)、甚だ(11)、大変に(6)、大変(5)、恐ろしく(2)、至って(1)、極く(1)、至極(1)、ひどく(1)
橘家円喬 (110 例)	大ききに(34)、大層(27)、大変(21)、大変に(15)、甚だ(4)、極く(3)、ひどく(3)、恐ろしく(2)、とても(1)
古今亭今輔 (26 例)	大変に(10)、大層(7)、大ききに(3)、大変(3)、えらく(1)、ひどく(1)、べらぼうに(1)
柳家小さん (66 例)	大変に(23)、大層(18)、大変(7)、ひどく(7)、甚だ(5)、大ききに(3)、ばかに(2)、至って(1)
三遊亭円生 (6 例)	甚だ(2)、大ききに(1)、大変(1)、大変に(1)、ひどく(1)
三遊亭遊三 (6 例)	大変に(2)、大ききに(1)、大層(1)、大変(1)、甚だ(1)
三遊亭新朝 (4 例)	大層(2)、極く(1)、大変に(1)、
土橋亭りう馬 (6 例)	大層(2)、大ききに(1)、恐ろしく(1)、大変(1)、大変に(1)
桂文楽 (8 例)	大層(3)、大ききに(2)、恐ろしく(1)、大変に(1)、ひどく(1)
談洲楼燕枝 (4 例)	大層(2)、大ききに(1)、甚だ(1)

从以上的调查结果来看,三遊亭円遊、橘家円喬、古今亭今輔三位演者的程度副词使用顺位,从第1位到第4位都含有“大層”“大變に”“大變”“大きに”。从其他的演者所使用的程度副词种类来看,还是“大層”“大變に”“大變”“大きに”被演者爱用。

除此之外,本文还对《落語》中程度副词的使用者、各阶层人们的语相也进行了调查,得出的结论是程度副词的使用与其使用者的身份、职业及年龄无关。特别是出现很多用例的“大層”“大變”“大變に”“大きに”的使用人物是多种多样的,有店铺老板、老板娘、丈夫、妻子、伙计、学徒、闲居的老人、家臣、近臣、经管人、帮闲、女仆、保姆、客人、小偷、开旅店的、卖豆腐的、卖菜的、卖油的、武士、老师、医生、木匠、老爷、名妓等等。下面是其中的一部分的用例。

1. “大層”的用例

(1)大層縮んだ者に譬へて被仰いますが、今でこそ斯んなに成りましたけれ共、妾の羽二重肌だった事をお忘れなすつたか。(第一卷 25 页“乾物箱”)

说话者是妻子,听话者是她的丈夫。

(2)子“へエ余程工合が變つて居ります、嵐山杯も見て参りました。殊に西京の本願寺さまも大層御立派に御普請が出来ました。”(第二卷 308 页“西京土産”)

说话者是孩子,听话者是他的母亲。

(3)客“お前の所は大層美しいのが揃って居る”(第三卷 285 页“墓違い”)

说话者是客人,听话者是妓院的小伙计。

(4)小僧“モシ、旦那様、大層うなされてお出で、ムぎいます”(第一卷 412 页“宮戸川”)

说话者是小伙计,听话者是年轻的男主人。

2. “大變”的用例

(5)若“何んだ。ヨ騒々しい。些と黙って歩行きナ。阿父に大變叱られたから、小言賃に何にか馳走で遣ろうか”(第一卷 8 页“成田小僧(上)”)

说话者是年轻的男主人,听话者是小伙计。

(6)へエ。誠にお気の毒さまだが、大變忙しい

ので抛有ません(第一卷 107 页“素人浄瑠璃”)

说话者是小伙计,听话者是男主人。

(7)妻様“アラー一寸おふだや。旦那様が^{大變}うなされて御いでなさるではないか”(第二卷 134 页“夢の後家”)

说话者是妻子,听话者是她的佣女。

(8)次郎“姉さん姉さん、^{大變}善い女が出ましたぜ。彼女何んですか”(第三卷 124 页“三軒長屋”)

说话者是老百姓,听话者也是老百姓。

3. “大變に”的用例

(9)“皆んな^{チョイ}と来て御覽、上から吹き卸したと見えて^{大變}に積つたネ。是丈けの処で真白に成つたんだが……^{チョイ}と来て御覽、梅干の核へ積つた雪を。綺麗だから”(第一卷 35 页“鰻沢雪の酒宴”)

说话者是男主人,听话者是他的客人。

(10)根が^{大變}に親孝行で貴方や内儀さんをお思ひなさる事を実に恐れ入った者で、乃公も生涯独身では居らない。何日一度は女房といふ者を持たなければならない。(第二卷 266 页“女丈夫”)

说话者是办理杂物的小吏,听话者是主人。

(11)三“ヲヤ姐さん、檀那が^{大變}に美代ちゃんに焦れて居る……”(第二卷 361 页“弁天詣り”)

说话者是艺人,听话者是老百姓。

(12)一“此りゃア若檀那、^{大變}に痛う御坐いますが、何う為たんで御坐います”(第三卷 78 页“幫間針”)

说话者是吹鼓手,听话者是年轻的男主人。

“大きに”的用例:

(13)梅“有難う、^{大き}に快いんです”(第一卷 18 页“成田小僧”)

说话者是佣女,听话者是艺人。

(14)多“へエ極月の御晦日に死なれまして^{大き}に困りました。”(第二卷 387 页“雪中梅”)

说话者是佣人,听话者是绢店主人。

(15)良“^{大き}に遅刻いたしました”(第三卷 174 页“初音のお松”)

说话者是医生,听话者是老爷。

(16)熊“今此旦那に訳を聞いて大きに感心しました”(第三卷 185 页“猫久”)

说话者是手艺人,听话者是他的师傅。

(二)《演説》和《史談会》中程度副词的使用状况

从《演説》资料中检索出 17 种程度副词。从《史談会》资料中,检索出 16 种程度副词。在《演説》和《史談会》中,从使用位次上看,第 1 位到第 7 位都是“大いに”“甚だ”“非常に”“ごく”“大層”“大変”“頗る”这几个程度副词,并且,第 1 位都是“大いに”,第 2 位都是“甚だ”。因此,在这里,把程度副词在《演説》和《史談会》中的使用情况归结到一起分析。“大いに”“甚だ”这两个词,其使用次数在各资料中约占半数。但是,第 1 位的“大いに”在《落語》中只出现一次:

(17)源“どうも遠方の事で御坐いますから。手前も誠に無人で大金も御坐います事で、大いに心配で御坐いますから”(第二卷 194 页“出世の鼻”说话者:蔬菜店的主人)

这之外,“非常に”在《演説》中使用位次是第 3 位(54 例,13.6%),在《史談会》中是第 5 位(60 例,5.7%),而在《落語》中却是第 11 位(7 例,0.9%)。另外,“頗る”“極めて”“極々”“大層に”这 4 个词在《演説》和《史談会》中虽然使用率低,但在《落語》中却完全没出现。

本次调查中,在《演説》资料中出现的程度副词的使用者共 56 人。像高田早苗(教育家、政治家、历任早稻田大学校长、大隈内阁的教育大臣等)、阪谷芳郎(政治家、日本大藏大臣、东京市长、贵族院议员)、添田寿一(财政家,实业家,经济学者)等这样的知识分子比较多。“大いに”“甚だ”“非常に”的使用率各占全体的 10% 以上,用例分布于全部的演说资料中。《史談会》中程度副词的使用者共 88 名,大部分是像落合直亮(国学者、神道家)、細川潤次郎(幕末的土佐藩藩士、法制学者、教育者)这样的在明治维新时期掌管各藩事务的武士、知识分子、诸侯。“大いに”“甚だ”的使用率各占全部用例的 10% 以

上,其用例分布在各辑当中。下面是《演説》和《史談会》中一部分的用例:

(18)人民大いに怒って其肉を食わんと迄に奮激する。(《演説》第十五卷 211 页,演说者:高田早苗)

(19)昔羅国と云ふ国は、甚だ強大の国であったが(《演説》第十六卷 383 页,演说者:阪谷芳郎)

(20)夫れ故此財政案を編むのには大蔵大臣も非常に骨を折りまして誰が見ても分かり易く不平の少ないやうにせねはなりません。(《演説》第十六卷 76 页“演说者:添田寿一”)

(21)夫故に佐幕正義と云ふ名を付けられました。討幕論の人からは大いに忌まれて居りました。(《史談会》第十二輯 62 页,谈话者:落合直亮)

(22)納戸向きの者共ハ甚だ怪しみました。(《史談会》第十二輯 105 页,谈话者:細川潤次郎)

但是,这些程度副词是每位演说者、藩士、知识分子都广泛使用呢,还是只集中于部分使用者呢,对此有进一步进行调查的必要性。为此,调查了各程度副词的使用者人数。在《演説》中,“甚だ(38 人)”“大いに(34 人)”“非常に(26 人)”“大層(18 人)”“極く(16 人)”“頗る(15 人)”“大変(12 人)”“大変に(10 人)”“至って(9 人)”“至極(6 人)”“極めて(5 人)”“大きに(3 人)”“大層に(2 人)”“極端に(2 人)”“とても(2 人)”“極々(1 人)”“全然(1 人)”。其中“甚だ”的使用人数最多,共有 38 人,占出场总人数 56 人的半数以上。“大いに”也大体相同。由上述可知,当时“甚だ”“大いに”在演说家、知识分子中间被广泛使用。在《史談会》中,“大いに(65 人)”“甚だ(46 人)”“大変(32 人)”“極く(27 人)”“至極(23 人)”“大層(21 人)”“非常に(20 人)”“至って(19 人)”“頗る(16 人)”“大変に(15 人)”“大きに(10 人)”“極めて(8 人)”“ひどく(6 人)”“とても(4 人)”“極々(2 人)”“大層に(1 人)”。其中“大いに”的使用者是 65 名,“甚だ”的使用者人数也有 46 人,两个词都占出场总人数 88 人的半数以上。可见,“大いに”“甚だ”被多数的藩士、知识分子使用。

(三) 程度副词的文体特征

根据本次调查,明确了程度副词的使用状况在“落語”“演説”“史談会”这三种资料中有着显著的差异,这体现了它们的文体特征。

本文所探讨的是词的文体,对于词的文体的解释,本文遵照宮島達夫(1972)^①的表述:“単語の文体というのは、文章全体としての文体を成り立たせるような、個々の単語のもっている特徴のことである。たとえば、ある文章がくだけた調子でかかれていますというとき、その調子を決定する一つの要素としては、そこにつかわれている単語の性質、すなわち、あまりかたくるしいものではなく、日常的な会話でもつばらもちいられるものだ、ということがはたらいっているであろう”。

在《落語》中,“大層”“大變に”“大きに”“大變”的使用频率是非常高的,被各阶层的登场人物经常使用。相反,在《演説》和《史談会》中,这4个词的使用率都是10%以下。因此,可以认为“大層”“大變に”“大きに”“大變”在当时不受语相的限制,是作为百姓的日常用语在比较随意的场合被广泛使用的。《演説》和《史談会》中的程度副词的使用很相似,“大いに”“甚だ”的使用频率非常高,被多数的知识分子和藩士所使用。相反,在《落語》中,这两个词的使用率在7%以下。因此,可以认为“大いに”“甚だ”是当时郑重场合的发言中经常被知识分子阶层使用的词语。

“ひどく”在《落語》中的使用率约5%。与此相对,在《演説》中却没有用例,在《史談会》中的使用率也非常低。因此,可以认为,比起郑重场合,在随意的场合多使用“ひどく”。“頗る”在《演説》和《史談会》中的使用率约5%,在《落語》中没出现。“非常に”在《演説》和《史談会》中的使用率是5%以上,但在《落語》中,其使用率非常低,只有0.9%。因此可以说,比起随意的场合,“頗る”“非常に”在郑重的场合比较容易被使用。“恐ろしく”“いやに”“ばかに”“至って”“至極”“うんと”“とても”“べらぼうに”“え

らく”“極端に”“極々”“全然”“大層に”“極めて”在三种语料中使用率都非常低,可以认为这些词在明治二十年代的人们口语中不被常用。其中,“恐ろしく”“いやに”“ばかに”“うんと”“べらぼうに”“えらく”只在《落語》中出现,在随意的场合容易被使用,“極端に”“極々”“全然”“大層に”“極めて”只在《演説》和《史談会》中出现,在当时只在郑重的场合容易被使用。“とても”在三种资料中都出现,但是用例很少,在使用上没有明显的倾向性。

根据以上对《落語》《演説》《史談会》这三种速记资料的调查和分析,在一定程度上明确了当时的程度副词的文体特征。本文虽然实证了“大層”“大變に”“大きに”“大變”是明治20年代在口语里经常被使用的程度副词,但是,在现代日语口语中,只有“大變”被广泛使用;“大層”现在经常出现在老年人的会话中,在年轻人的会话中几乎不出现;“大變に”虽然没有消失,但它的使用率远远不及“大變”,在表示说话人的一种无以言表的夸张的心情时,有时被使用。另外,“大きに”虽然在明治20年代与“大いに”共存,但是现在已被其音便形“大いに”所取代,“大きに”成为关西的表达感谢心情的一种方言“大きにありがとう”的略语,在日语标准话中已不被使用,“大いに”虽然在人们的口语中出现,但多使用于正式场合。

五、结 语

本文以能反映近代人们口语真实情况的“落語”速记本,“演説”速记本,“史談会”速记本这三种速记资料为语料,对近代表示“高量级的”一类程度副词的使用情况进行了调查研究。通过实证明确了近代在人们口语中比较常用的程度副词,明晰了“大層”“大變に”“大きに”“大變”“大いに”“甚だ”的文体特征。“落語”是一种口语体的文艺形式,“大層”“大變に”“大きに”“大變”是其口语中代表的程度副词,而“演説”等是一种郑重的演讲形式,多使用让人感觉有分量的副词,“大いに”“甚だ”就是其代表的程度

^①宮島達夫. 動詞の意味・用法の記述的研究[M]. 東京:秀英出版,1972:709.

副词。程度副词所表示的程度是由作为语言主体的说话人自身的认知或判断决定的,即主观性的,在语言主体的意识当中存在着程度副词的高低排序,即程度性差异。在近代的人们心中,“大いに”“甚だ”的程度性也许要高过“大層”“大變に”“大きに”“大變”。本文的调查对象虽然与松井栄一相同,但是因为调查的资料和研究的年代范围的不同,结果有相似之处也有不同之处。通过与松井栄一研究结果对比,不容置疑的是“大層”“大變”“大いに”“甚だ”是近代人们口语中最常用的具有代表性的程度副词。

Study on the stylistic features of degree adverbs in modern oral Japanese

Zhao Hong

(School of Japanese Language, Dalian University of Foreign Languages, Dalian 116044, China)

Abstract: As a ring of Japanese adverbs of degree history study, this paper made a research on the usages of degree words meaning “high degree” in modern times, based on three shorthand files—rakugo (traditional comic storytelling), speech, shidankai (history research meetings)—which can reflect the real situation of people’s oral Japanese at that time. The findings showed that “taiso”, “taihen ni”, “okini”, “taihen”, “ookini” and “hanahada”, all mean “very”, which were frequently used in oral Japanese at that time. “Taiso”, “taihen ni”, “ookini” and “taihen” were not restricted in graphetics and used in casual occasions during daily life in a wide range. “Ooini” and “hanahada” were often used by lords and intellectuals when delivering a speech in formal occasions; “hidoku”, “osorosiku”, “iyani”, “bakani”, “unto”, “berabou-ni” and “eraku” (all mean “very”) were presumed to be used in casual occasions while “ikanaru”, “hijyo-ni”, “kyokutan ni”, “gokugoku”, “zenzen”, “taisou ni” and “kiwamete” (all mean “very”) in formal occasions. This paper clarified the stylistic features of modern oral Japanese adverbs of degree at some extent.

Key words: shorthand files; modern Japanese; oral Japanese; adverbs of degree; stylistic features

〔责任编辑:李宝贵〕